

愛知の水産関連年表（その1：縄文時代から江戸時代まで）

西暦	和暦	月日	事項
縄文時代（～前300頃）			鳴海丘陵の雷貝塚、本刈谷貝塚、寺津貝塚、豊川の稲荷山貝塚、吉胡貝塚、伊川津貝塚、保美貝塚などの貝塚で、魚の骨、鹿角製釣針が発見 漁具のおもりに使用した石錘が南知多町片名で発見
弥生文化期（前300～350頃）			鉄製の釣針の使用 末期には土器による製塩が開始 後期の上り築が清須市朝日遺跡から出土
大和時代（350頃～710）			製塩が盛ん（S30年代まで吉良町で続く） 木簡の記録によると、三河、幡豆、篠島の地名とともに、サメ、ワガ（メバル）、スズキ、クロダイが貢物として藤原宮（694～710）に献上
大宝1（701）			大宝律令の雑令中に「山川藪沢の利用は公私之を共にす」と定め、海川における漁業は万民の自由を原則とする趣旨
大宝2（702）			美濃国各務郡中里の戸籍に「鵜養部目都良売（うかいべめづらめ）」との記述（木曾川での鵜飼の最古の記録）
万葉時代（7世紀後半～8世紀後半）			天然の良港「須佐の入り江」（豊浜）が万葉集巻十一に歌われる 「味鴨の住む すさの入江の 荒磯松 吾を待つ児らは ただ一人のみ」（味鴨：アジ）
奈良時代（狭義）（710～'84）			平城京跡から出土の木簡中の贅札50点中36点が参河国幡豆郡篠嶋、折島（佐久島）からのもの 「佐米楚割（サメズワリ：サメの身がきニシン様のもの）并赤魚」の献上が記載
奈良時代（710～'94）～			三河湾の特産物として、タイ、アワビ、ナマコ、海藻類、塩が加工品として、都に出荷（「延喜式」主計帳に記載）
平安時代（794～1192）			鵜飼が行われた 篠島で伊勢神宮の三大祭に供えられる神饌「おんべ鯛」の奉納が始まる（起源は不明、一説には、1192年、篠島に立ち寄った倭姫命（ヤマトヒメノミコト）の命による（「皇太神宮年中行事」写本による記録） 神宮の記録では「干鯛」、篠島の記録では「御弊鯛（オンベイダイ）」
南北朝時代（1335～'92）			師崎が「吉野～伊勢～東国」を結ぶ海上ルートの拠点、一本釣り、延縄等の釣漁が盛況 篠島に、後村上天皇が太子の時、6ヶ月滞在
鎌倉時代			源頼朝が野間で地曳網によるイワシ漁を見たと言えられる 土豪・豪族が漁場の支配権を持つ（六条潟と西浜の歴史,S56/10）
室町時代			六条潟（豊川河口左岸側）・西浜（同右岸側）の農家がハマグリ、アサリを採取し、近隣村に販売（六条潟と西浜の歴史,S56/10）
戦国時代（1485～1573）			津島港が商港として栄え、織田家の収入源となる 漁業は延縄、一本釣りに留まり、網漁具の本格使用は江戸時代以降
慶長1（1596）			篠島の板谷金兵衛が悪天候で足止めされた徳川家康を吉田（現豊橋市）まで送り届け、その報償として「金べさのお墨付き（駿河～紀伊7ヶ国の漁業権、渥美半島外浜・西浜の営業権）」を得た（伝承）
慶長年間（1596～1614）			尾張三河で揚繰網（巻網の一種で、手船1そう、網舟2そう、36名）が発達し、後に全国に広がる 南知多、東幡豆、形原、牟呂などが中心で、江戸時代から明治時代に一時期を画す
慶長7（1602）			師崎領主千賀がイワシ漁（地曳網）の改良普及に努める
慶長16（1611）			徳川家康が師崎の千賀邸を訪問し、日間賀島のタイ網漁を見たのを機に、日間賀島の東里が江戸の将軍に、西里が尾張藩主に御用鯛を献上することになる（明治維新後も御用旗を立てて操業し、三河の漁船を追い払ったため、行政問題となった）

江戸時代（1603～1868）	渥美半島の表浜（遠州灘）、西浜（中山水道）、湾奥の西浦、大塚などの砂浜の発達した漁村でイワシ、アジ、サバ、コノシロ、カニ、ウナギ、ボラ、スズキ等を地曳網で漁獲（尾張部では砂浜の発達が悪く、僅かに野間、内海で操業）
	イワシの大豊漁期が、元禄（1688～1703）から享保（1716～'35）、寛政（1789～1800）から天保（1830～'43）の2回
	この時代、伊勢湾にクジラがよく入り、銚突きで捕獲、この技術が発達し、江戸時代前期に紀州に伝えた その後、網との併用で益々進歩し、江戸時代末期まで続く
寛永12（1635）	碧海・幡豆・宝飯3郡の年貢米の積出港として、御馬（現豊川市）、犬塚（現蒲郡市）、平坂（現西尾市）、鷺塚（現碧南市）、大浜（同）の五港が指定
（1660～'70）頃	犬山城第3代城主成瀬正親が、三河国足助（現豊田市）から鵜匠2名を呼び寄せ、御料鵜飼を行う（犬山での鵜飼の始まり）
延宝・天和年間（1673～'84）	東京湾の品川・大森の漁師が海に筏を建てノリ養殖を開始、全国初の試み（次いで広島が宝暦年間（1751～'64）に開始）
貞享4（1687）	松尾芭蕉、愛弟子杜国を訪ね渥美郡保美村（現田原市）を来訪 伊良湖を訪れ「鷹ひとつみつけてうれしいらご崎」の句などを詠む
元禄4（1691）	日間賀島の船数121艘で知多郡最多（タコ釣り、ワカメ切り、テングサ採り、刺網、小網、藻曳き、突きとり、繰網）（知多郡船勢）
宝永4（1707/10/28）	宝永地震（宝永の大地震）、海岸一帯に津波、大被害（震度6、高松村津波15m）
享保17（1732）	宝飯郡三谷村（現蒲郡市三谷町）若宮八幡宮の棟札に「にがしお」の記録と、「つなし大漁」の記述あり
元文5（1740）	「三河国二葉松」に、宝飯郡の村名欄に湊として、三谷湊、御津湊、御馬湊、前芝湊の4ヶ所が記載、その他海辺の村には磯が付され、不相磯、大塚磯、形原磯、西浦磯が記載
明和5（1768）	若年寄水野忠友、碧海郡大浜村（現碧南市）に大浜陣屋を設置、商工業、漁業、湊・浜での賃稼ぎ、出稼ぎ（前浜新田開発）、女性の木綿稼ぎ等で、人口が急増（1767年→1867年、大浜村5,461人→8,611人、棚尾村997人→5,790人、参考：1896年（M29）刈谷町2,676人、知立町3,531人）
寛政年間（1789～1800）	鵜飼が衰退
享和年間（1801～'03）	鵜飼が廃絶
文化6（1809）	犬山城第6代城主成瀬正典が隠居の際、殺傷禁令を出し、犬山鵜飼が禁止
江戸時代～太平洋戦争	江戸時代以降、新田開発で、渥美湾、衣浦湾を中心に約10,000haの干潟が農地に転用（現三河湾面積の1/6に相当）
天保6～8（1835～'37）	天保の大飢饉：田原藩、渡邊華山の指導で「報民倉」を築き、一人の餓死流浪者を出さずに飢饉を乗り切る
嘉永4（1851）	渥美郡江比間村永久丸が熊野灘で遭難、乗組員4名がグアム島北東で米国捕鯨船に救助、うち2名が5年後に帰国、米国見聞の「漂民聞書」を記す
嘉永6～7（1853～'54）	愛知郡下之一色村（現名古屋市中川区）、知多郡新知村（現東海市）でトリガイまんが漁が隆盛
安政1（1854）	宝飯郡前芝村（現豊橋市）の杵野（もくの）甚七（銀右衛門）が豊川河口で筏建（ひびたて）ノリ養殖に成功
安政2（1855）	宝飯郡前芝村（現豊橋市）で、ノリ養殖開始（H10まで続く）
安政4（1857）	宝飯郡前芝村（現豊橋市）のノリ養殖業者21名（「愛知の海苔」のり共販20周年記念） 海部郡鍋田村（現海部市）のノリ養殖は、のり問屋市兵衛が尾張藩主の許可を得て開始（S38まで続く）
安政5（1858）	杵野甚七が前芝・梅藪・日色野・平井・伊奈5ヶ村庄屋に呼びかけ、ノリ漁場大拡張を吉田藩主に誓願（同年許可）

安政 6 (1859)	東三河のノリ養殖が宝飯郡梅藪村、日色野村、横須賀村（渡津）（以上現豊橋市）、伊奈村、平井村、下佐脇村、御馬村、西方村、浮野村（以上現豊川市）に普及（日色野・伊奈・平井・西方・浮野は S50 まで続く、渡津は S52 まで、梅藪・下佐脇・御馬は H10 まで続く）
文久年間（1861～'63）	知多郡亀崎村（現半田市亀崎町）に打瀬網が導入
元治 1 (1864)	ノリ養殖業者が白魚網業者と紛争（永禄元年頃から網運上を藩主に納め由緒正しい白魚漁師が、ノリ箕の枝が折れて白魚網に入ると箕の撤去を要求、庄屋の裁断で解決）
慶応 2 年 (1866)	箕場割り当てで、優先権のある前芝・梅藪 2 村に日色野・平井・伊奈 3 村が怒りを爆発させ紛争（8/26、3 村代表者が蓑笠に身を固め行動を起こしたことから「蓑笠騒動」という、杢野甚七が収拾に尽力、M2 に解決）
	宝飯郡前芝村（現豊橋市）のノリ生産、65 戸、850 両（「愛知の海苔」のり共販 20 周年記念）
慶応 3 年 (1867)	宝飯郡前芝村（現豊橋市）のノリ生産、91 戸、1,260 両（「愛知の海苔」のり共販 20 周年記念）
幕末以前	三谷湊が関千軒と並び「三谷千軒」と言われた（理由：遠州灘に湊がない、船着場が三河湾第一）
幕末期	宝飯郡三谷村（現蒲郡市三谷町）の藤田弥次郎、打瀬網を開発
幕末期	宝飯郡三谷村（現蒲郡市三谷町）の長田善右衛門、アカガイまんが漁法を開発

時の話題（その1：縄文時代から江戸時代まで）

○縄文時代から弥生文化期の漁業

鳴海丘陵の雷貝塚、本刈谷貝塚、寺津貝塚、豊川の稲荷山貝塚、吉胡貝塚、伊川津貝塚、保美貝塚などの貝塚で、魚の骨、鹿角製釣針が発見されており、沿岸各地に集落が作られ、採貝採藻、釣りが行われていたと想像されている。なお、鉄製の釣針は、弥生文化期に使用されている。

○弥生文化期から江戸時代の漁業—網漁業の発達—

戦国時代までの漁業は、延縄、一本釣が主である。網漁業が盛んになるのは、江戸時代以降になってから。

慶長年間に揚繰網（巻網の一種で、手船1艘、網船2艘、36名）が発達し、江戸時代から明治時代に一時期を画し、後に全国に広がる。

打瀬網の導入は、江戸末期の文久年間（1861～1863年）といわれている。

○製塩

弥生文化期（紀元前300～350年）末期に開始され、大和時代に盛んとなる。西尾市吉良町では、昭和30年代まで続いた。

塩は、奈良時代～平安時代、三河湾の特産品として、都に出荷されたと「延喜式」主計帳に記載されている。

○源頼朝

源頼朝が野間（現知多郡美浜町）で地曳網によるイワシ漁を見たといわれている。

なお、野間は、源頼朝の父である源義朝が平治の乱で敗れた後、家人の裏切りで命を落とした場所と知られている。

○歴史的な話題に事欠かない篠島

万葉集巻七には「夢のみに、継ぎて見えつつ、小竹島（しのじま）の、磯越す波の、しくしく思ほゆ」と詠まれているが、「小竹島」は篠島に比定されている。

慶長元年（1596年）、悪天候のために篠島で足止めされた徳川家康を板谷金兵衛が吉田（現豊橋市）まで無事に送り届け、その報償として駿河・遠江・三河・尾張・伊勢・志摩・紀伊の計7ヶ国における漁業権、渥美半島の外浜と西浜の営業権（総称して「金べさのお墨付き」）を得たという伝承が残っている。

篠島といえば「おんべ鯛」。起源は不明だが、1,000年以上の歴史があると云われている。

○日間賀島の御用鯛

徳川家康が師崎の千賀邸（尾張藩船奉行）を訪問した際、日間賀島のタイ網漁を見た。これを契機に日間賀島の東里が江戸将軍家に、西里が尾張徳川家に、御用鯛を献上することになった。

○三河湾の干拓

江戸時代以降、新田開発で、渥美湾、衣浦湾を中心に、約10,000haの干潟が農地となった。

大浜村・棚尾村（現碧南市）は、大浜陣屋の設置以降、商工業、漁業、新田開発の出稼ぎ等で人口が急増した（刈谷、知立より人口多い）。

○宝永の大地震

南海トラフ地震のひとつ、宝永地震（宝永の大地震）が宝永4年（1707年）10月28日に発生した。マグニチュードは8.4あるいは8.7と推定される。海岸一帯に津波が来襲し、大被害を招いた。高松村（現田原市赤羽根町）では、震度6、津波高15mとされる。

二川、鳴海、宮（熱田）は「半潰れ」、池鯉鮒（知立）、御油、赤坂、藤川は「事なし」と記録されている。

尾張藩の奉行が手記で、名古屋城や城下の武家屋敷の被害、液状化の様子（地面が裂け、泥が湧き出した）を残している。

○にがしおの記録

宝飯郡三谷村（現蒲郡市三谷町）若宮八幡宮の棟札に、享保 17 年（1732）に「にがしお」が発生したとの記録が残されている。三河湾では、富栄養化が進んでいない江戸時代でも、時折、貧酸素化が進行したことの証明である。

なお、この若宮八幡宮には、「天下の奇祭」とされる三谷祭りの始まりとされる伝説が残されていることで広く知られている。

○クジラ漁

江戸時代はクジラが伊勢湾によく入り、始めは銚突きで、その後は網との併用で捕鯨が進歩した。銚突き漁は、江戸時代前期に紀州に伝えられた。

「くじらの町」で知られる太地では、地元の名族和田忠兵衛頼元が、堺の伊衛門、知多半島の伝次と協力して、慶長 11 年（1606 年）、熊野水軍の戦闘技術に基づいて組織的な捕鯨法を開発したと記録されている。

「紀州に伝えられた銚突き漁」と「知多半島の伝次の協力」に因縁を感じる。

○鵜飼い

鵜飼いの歴史は、古く、平安時代以前に行われていたようだ。木曾川鵜飼いは、1660 年代に犬山城主が三河国足助から鵜匠を呼び寄せたのが始まりとされる。

寛政年間以降、鵜飼いは衰退し、享和年間に廃絶となった。

○ノリ養殖の開始

縄文の頃から海藻類を食されていたとされるが、文献（大宝律令、延喜式）ではアマノリ等が年貢として記録されている。

安政元年（1854 年）、宝飯郡前芝村の空野甚七が、豊川河口で築建ノリ養殖に成功。数年のうちに、豊川河口右岸の延長・西浜（宝飯郡の梅藪村から御馬村）で普及した。

他方、豊川河口左岸の延長・六条潟におけるノリ養殖の普及は、明治 30 年代と遅れた。